

キャラクター名 プレイヤー名

メインクラス	エキスプローラー	Lv.1:	シーフ	レベル	15
サポートクラス	グラディエーター	Lv.1:	アルケミスト	性別	男
称号クラス				年齢	19
種族	ヒューリン			境遇	記憶喪失
出自(効果)	不明			目標	運命

	筋力	器用	敏捷	知力	感知	精神	幸運
基本値	24	30	27	11	9	14	6
ボーナス	8	10	9	3	3	4	2
クラス修正	0	2	2	0	2	1	1
他修正						2	
能力値	8	12	11	3	5	7	3

HP	157
MP	120
フェイト	8

装備品		射程	命中	攻撃	回避	物防	魔防	行動	移動
右手	錬金術武器(短剣)		+0	20					
左手	ワイヤードガダー	至近	-2	16	0	0	0	-2	0
頭部									
胴部									
補助	トリックマント					5			
装身具	英雄叙事詩								
能力値			12	0	11	0	7	16	13
スキル	カバイク、フットワーク、ヤガキ、スペシャライズ		3	10	4	25	15		
その他	シッコ、トウシ、ジエミ		2	4	1			1	15
総計(右)			17	34					
総計(左)			15	30	16	30	22	15	28
総計(両)									m
ダイス数			3 d	5 d	3 d				

	能力値	スキル	その他	合計	ダイス数
トラップ探知	5			5	+ 2 d
トラップ解除	12			12	+ 2 d
危険感知	5			5	+ 2 d
エネミー識別	3			3	+ 2 d
アイテム鑑定	3			3	+ 2 d
魔術判定					+ d
呪歌判定					+ d
錬金術判定					+ d

所持品	
異次元バッグ	名馬
ベルトポーチ	蘇生薬
ポーションホルダー	万能薬
ランチボックス	強心丹
ウェポンケース	グレートHPポーション
クイックケース	グレートMPポーション
小道具入れ	耐毒符
シースベルト	飛翔符
冒険者セット	理力符(火)
漆黒の星	転移符
闘士の鎖	バイパーロッド

現在重量:	50	所持金:	0	預金・借金:	0
最大重量:	56				

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ハーフブラッド	★	-	パッシヴ	-	-	-		
効果: タイミングがメイキングのヒューリン以外の種族スキル一つを修得。ただし幸運基本値-3								
テクニカルマスター	1							
効果: 器用基本値+3								
変身<竜>	1		戦闘前				シナ1回	
効果: 判定+1D スキル3個追加								
	1							
効果:								
インタラプト	1		効果参照				シナ1回	
効果: スキル打ち消し								
ワイドアタック	1		メジャー					
効果: 範囲攻撃+SL×2								
バタフライダンス	1		P					
効果: 回避判定+1D								
アンビデクスタリティ	1		P					
効果: 双持ち								
ドッジムーブ	1		効果参照					
効果: 回避+SL+2								
ナイフパリー	1		ダメ前					
効果: 攻撃力分物理軽減								
サイドワインダー	1		マイナー					
効果: ダメ+【器用】								
スペシャライズ: 錬金術	1		P					
効果: 指定武器命中ダメ+SL/+SL								
	1							
効果:								
AM:錬金術	1		P					
効果: 命中+1D								
ウェポンクリエイト	5		マイナー					
効果: 武器を作る								

「俺が…英雄？」
「こんなので英雄は務まらない。もっと強くならないと。」
目を覚ますと知らない景色。抜け落ちた家族や故郷、自身の記憶の代わりに与えられたものは、英雄という重すぎる称号。
押し寄せる期待に応えるため、そして生きていくために彼は英雄として活動することを決意する。しかし、一方で自分の実力が評価に見合っていないことを疑問に思っている。先行きの見えない不安と、記憶と共に大切なものを失ってしまったような虚無感を胸に押し込めて、ひとまず強くなって評価に見合う実力を手にすることを目標に定める。いつか記憶が戻ったときに、体を借りているだけの自分がユリウスに恥じないように。
・1話終了後
極限の状態、思考の中に現れる何者かの声。あるいはこの声は自分なかもかもしれない。声は問いかける。「英雄とは？」英雄はどんな状況でもことごとくを助け、意思を貫く馬鹿だ。初めて自分の意思で結論を出した時、彼は、ユリウスという人物は、初めてこの世に足を踏み出すのだった。彼は彼なりの馬鹿を貫くことに決める。いつか本当の意味でユリウスと肩を並べるために。
・4話終了後
「俺は何をしていた？僕は何もしていない。私には何もできない。じゃあ、お前は何のためにここにいる。俺は、僕は、私は、ここにいる英雄もどきは一体何だ？」
少しづつ英雄としてうまくやれていると思っていた。自分は努力していると。よく考えてみる。お前は得体のしれない竜の力にすがっているだけじゃないか。それでうまくやれると、心のどこかで慢心していた。だからこんなことになった。あの日掴みかけた馬鹿の確かな意味はわからないまま、俺はとんだ大馬鹿者になった。俺を俺たらしめているものは何だ？お前の核は、どこにある？
・5話終了後
これが自分で導き出した答えであるとは断言できない。過去の自分の行いを聞いて、彼女の献身を聞いて、彼の支援を聞いて、気持ちが変わったのは確かなのだから。目覚めてから俺をどうやって過ごしてきただろう？何も変わらないじゃないか。彼女の言葉に導かれこまできた。ユリウスとして真の意味で新しい生を受けることができた。だからというわけではないのかもかもしれない。いまいち心の中を整理することはできないが、霧がかかった心の中ではっきり一つだけ見えるものがある。彼女をそのまま実験の道具にさせるわけにはいかない。英雄の定義も、自分が結局なにかもはっきりわからなくても、俺が生きている意味なんて見ただけでいいじゃないか。

